



1 人口減少に打ち勝ち、笑顔で暮らせる島根を目指す「島根創生計画」 2 「島根が好きなら誰でも活躍できるフィールドがあります」と話す京谷課長 3 職員同士のコミュニケーションを大切にしており、「自然と笑顔になれる職場です」と京谷課長



### 「島根創生」の担い手として 笑顔あふれる暮らしを未来へ

社会の土台づくりを担う公務員。その数は全国で約335万人に上り、うち8割超が地方公務員として、よりよい地域を創るために汗を流している。ひと口に「公務員」とくられることが多いが、所属する機関や部署によつて業務内容は多種多様。島根県総務部人事課の京谷大輔課長(54)は、「幅広いフィールドで活躍できるのが、県職員の魅力。島根が好きなら誰でも、必ず適性を見出せるはず」と断言する。

県職員の仕事は、戸籍や住民票などの手続きや社会福祉の相談などで住民と接する機会が多い市役所や町役場と違って、想像しにくい人が多くいかもしれない。「住民との関わり」という点では、市町村ほど密接ではないかもしれませんが、国よりは近い。一方、国家公務員は住民からは遠いですが、大局的な目線で制度を組み立てることで、人々の暮らしに関わっています。県では、制度と現場両方の仕事を行える面白さがあります」

そんな中、県が掲げている「島根創生計画」では、2024年度までの施策運営の総合的・基本的指針を示し、活力ある産業をつくる、結婚・

出産・子育ての希望をかなえる、安全安心な暮らしを守るなど8つの基本目標が打ち立てられている。京谷課長は、「課題の洗い出しから、目標を立て、遂行するまですべてに関わることができるのが県職員です」と強調する。

**多種多様な職種が連携し、豊かな暮らしを実現**

県職員は、広範囲の知識とスキルが求められる「ジェネラリスト」と、専門性が高い「スペシャリスト」に大きく分かれる。いわゆる行政職と言われるのが前者で、専門職とされる後者は、土木や建築、農林水産などの技師、保健師、薬剤師、獣医師などさまざま。多種多様な分野が連携して初めて、笑顔で暮らせる島根が実現する。

東西に長く、離島もある島根県。すべての地域を支えるため、県の地方機関は随所に配置されており、職員は定期的に異動する。京谷課長は、「配属先は本人の希望を考慮し、異動のために遠方に行くわけではありません」と前置きした上で、「いち県民として住んでみなくては分からないことも多い。県民目線で働くためにも、出身地以外の地域に住む経験をすることも大事」と言う。部署が変わると仕事内容がガラリと変わ

ることも県職員の特徴の一つ。「そんな環境ゆえか、意外と変化に強い人が多いんですよ」と京谷課長は笑う。公務員は前例踏襲に縛られている、という印象を持つ人もいる。しかし島根県職員は、「高齢化先進県」として全国に先駆けて大きな課題に向き合い、地域と共に議論を重ね、解決の道を探ってきた。そんな中、養われてきたのが、前例のない難題に対応できる高いスキルだ。

**島根創生を実現するために求める人物**

「人口減少」という大きな課題に立ち向かう県職員。多種多様な職種が活躍している中で、どのような人物が求められているのか。

「目の前の課題にコツコツと向き合うタイプの人も、既存の価値観にとられない突破力のある人も、いろいろなタイプの人が県には必要です。県民の皆さんの暮らしを守り、支えることが私たちの使命。タイプはさまざまでも、根底に思いやりや下支えのマインドを持っている人がいい」と京谷課長は話す。「人口減少」という課題に打ち勝つための切り口はさまざまであり、職員が個々に立ち向かうのではなく、議論し、支え合いながら仕事を進めていくことを大切にしています」

県では、職員がそれぞれの能力を伸ばせるよう入庁後の環境整備にも注力。各種福利厚生制度は、利用を促す取り組みが行われており、年次有給休暇の年間平均取得日数は12.4日(21年度)、男性職員の育児休業取得率は約半数に及ぶ。午前7時半から9時半の間で出勤時間を選べる「時差出勤制度」も好評だ。

21年度からは、採用1年目の職員を3年目等の若手先輩職員がサポートするメンター制度を全職場に導入。職場の人間関係や、仕事とプライベートの両立など業務の枠を超えて相談しやすいよう、あえて違う課の先輩を担当につけている。1対1の面談を定期的に行うほか、グループで集まる機会も設け、「コミュニケーション」の活性化を狙う。京谷課長は、「皆で隠岐に行ったり、副知事にインタビューしたりと、各自自由にグループ活動を行っています。新人のフォローはもちろん、先輩職員にとってもマネジメント能力を磨くことができ、刺激になっているようです」と紹介する。

約66万人の県民一人一人が、愛着と誇りを持って暮らしている島根県。島根県職員。島根を大切に想う気持ちがあれば、その一員として、活躍できる場所が必ずある。

## しまねけん 島根県

# 島根で見つける、可能性 多彩な職種で誰もが活躍できる

# 21

LEADING  
COMPANY



1 市町村の担当課とリモート会議を行う小村さん 2 《健康チャレンジデー》にウォーキングを兼ねた清掃活動を行う規家さん 3 上司とも密にコミュニケーションを交わしながら、保健師として誰もが健康な社会づくりを目指す 4 先輩職員らと図面を確認する今若さん 5 庁外で農業関連イベントの打ち合わせをする渡邊さん 6 和牛牧場で採血を行う伊藤さん 7 家畜の病気の検査を行うのも公務員獣医師の仕事の一つ。農家の方々と直接接することも多い



島根県

業種 公務

事業内容 人口減少に打ち勝ち、笑顔で暮らせる島根をつくる

創業 明治4 (1871) 年  
代表者 島根県知事 丸山 達也  
職員数 3962名 (男2869名 女1093名)  
〒690-8501  
島根県松江市殿町1番地  
TEL/0852-22-5111  
<https://www.pref.shimane.lg.jp/>

### 求める人材像 Check!!

- 県を取り巻く情勢や県民の皆さんの声に敏感である人
- よく考え、よく議論し、創造する人
- 何事にもチャレンジ精神を持って取り組む人

資料請求・お問い合わせ先

採用直通 TEL

0852-22-5438

採用直通 E-mail

[syokuin-saiyo@pref.shimane.lg.jp](mailto:syokuin-saiyo@pref.shimane.lg.jp)

資料請求

インターンシップ

会社見学

公式サイトは  
こちら



### 【保健師】 すべての人に健康を

看護師を目指した大学で、公衆衛生看護学を学んだ。スタディツアーでケニアを訪れ、健康的な生活の維持のために、社会の仕組みを整えることの重要性を痛感し、保健師への関心が高まった。

大学院で学びを深めたのち、広域的な健康づくりに携わろうと県保健師の道を選んだ。

初任地は、隠岐保健所。アルコールに関する健康問題について、データ分析や調査、個別の患者さんの生活のフォローなどを行った。「一人一人の思いを聴き、生活環境への配慮や社会資源を活用した支援の大切さを学びました。また、上司や先輩方、地域の方々にも支えていただき、保健師という仕事を通して一人の人間としても成長させてもらっています」。島根県では、保健師のための人材育成体制が整っていることも特徴だ。

今の部署では、県全体を見据えた健康づくりを推進。特に自身の健康に疎くなりがちな働きざかりの年代に注力する。「すべての人の心身の健康に携わることができるのが保健師。文化や価値観の違いも大事にして、県民の生活を支えられるような保健師になりたい」



健康福祉部健康推進課 保健師  
規家 美咲さん(27)  
2020年入庁(3年目)

大学院在籍中にはケニアを再訪、国際学会で研究発表したことも。より知見を深めようと、現在は大学院博士後期課程に在籍。研究にも力を注ぐ



### 【獣医師】 家畜を守ることで、人々の生活を守る

ペットブームなどで小動物の臨床を目指す獣医師が多い一方、牛や豚、鶏などの家畜衛生を担う公務員獣医師は担い手不足が続く。「知人に状況を聞き、医学部から獣医学部に志望を変えました。家畜伝染病の大規模発生時などには対応に追われますが、休みがきちんととれ、プライベートも大事にできるのは魅力でした」。島根県の採用は年齢制限が高く、臨床獣医師として経験を積んだ後に受験できるのも特徴だ。

伝染病が発生すれば、多数の動物が殺処分される。農場にとっては大きな打撃だが、正確な情報伝達と迅速な対応が被害の拡大を防ぐことになる。「日頃からの信頼関係が大事」と伊藤さん。普段から農場に出向き、伝染病の予防を注意喚起し、発生時には血液検査や解剖による診断、まん延防止の対策を行うことが主な業務だ。

診療業務は基本行わないが、動物病院が少ない地域では飼い主から相談を受けることも。「県下の農場すべてが対象。その規模感や責任の大きさはやりがいにつながっています。法律やマニュアルなど学ぶべき知識も多く、経験を積みながら成長したい」



農林水産部西部農林水産振興センター  
益田家畜衛生部 獣医師  
伊藤 寛人さん(26)  
2021年入庁(2年目)

大学の同級生の多くは小動物の臨床獣医師を希望していたが、自身の選択肢はブレなかった。父も県職員。ライフプランをイメージしやすかった



### 【行政】市町村との連携でより良い行政サービスを

家族が地方公務員という環境の中、自然と同じ道を目指すように。国家公務員と比較した時に、「地方公務員の方が地域課題に主体的に取り組めそう」と故郷で働く道を選んだ。

総務課配属中には、「自治体運営は人が大事」との考えから、職員自ら採用パンフレットを作成するプロジェクトに参加。取材から撮影、デザイン、構成まですべて若手4人で担い、県職員の仕事が分かりやすく伝わるよう工夫をこらした。

2021年度は中央省庁への研修派遣制度を利用して総務省で1年間勤務。急を要する国会対応など

を経験し、国の仕事のスピード感や進め方などに刺激を受けた。「県外事務所や省庁派遣などの経験が積めることも県職員の魅力」と話す。

現在は、市町村課で県内市町村の行政運営支援などを担当。「国の制度改革に応じて自治体でも対応する必要があるが、非常に複雑で現場は大変。国とのパイプ役として少しでも役に立てれば」と語り、軽やかなフットワークで19市町村に足を運ぶ。



### 【総合土木】道を通して、安全安心快適な地域をつくる

道路事業の計画から設計、工事、施工管理を担当。専門知識や技術に加え、共に事業を進める民間企業や地元住民らとのコミュニケーションが重視される場面も多い。「情報の伝達ミスで、住民の方に不快な思いをさせたことも。一つのものを作り上げていくためには、周囲の人との関係も大切です」

現在は、国道432号の渋滞解消を目的としたバイパス工事や、主要幹線道路である県道松江木次線のバイパス工事などに従事。関わった業務が形となって残り、住民らの利便性向上に寄与できることは、大きなやりがいにつながっている。

農業土木を学んでいた高校時代、県内が大きな水害に見舞われたのを機に、地域に貢献できる仕事への関心が強まった。大学に進学して知識を深めたのち入庁。「事業計画や改良工事、施設の維持管理といった一連の事業に関わることができるのは県職員ならではの、ICTなどの活用で災害発生時もいち早く対応できるよう努めたい」。今後は各種資格取得など、スキルアップを狙う。



### 【農学】農業者とともに創る“つなぐ農業”

祖父が農家で幼い頃から農業が身近にあった。「GWは毎年、家族総出で田植え。正直農業にいいイメージはありませんでした」と苦笑する。短大で栄養学を専攻も、食の根本である農作物について学びたいと思い4年制大学の農学部へ編入。卒業後、民間企業を経て、農業職(現農学職)で県に就職した。

初任地の農業技術センターでは、あんぼ柿などの6次産業化マーケティングを主に担当し、全県の普及活動について理解を深めた。農業普及指導員の資格を取得し、益田農業普及部へ異動後は、タラノメやウレイなど山菜の栽培現場で、長年農業に従事

している方々への指導に携わる中で地域農業に対する思いなどから教えてもらった。

現在は県庁で、県内に約150人いる農業普及員の活動計画立案や予算管理、農業者の育成を担当。「農学職以外の職員とも関わりが増え、今までとは違う視点で議論や企画提案できることが面白い。全県を広く見たり、各地域に深く関わったりと、幅広い業務を通じて、島根の農業振興に貢献したい」



地域振興部市町村課 主任主事  
小村 慶さん(28)  
2018年入庁(5年目)

採用パンフレット作りの活動など「人への投資」に関心。今後は、子育て支援や教育に関わる仕事に携わってみたい



土木部松江県土整備事務所 主任技師  
今若 純也さん(27)  
2018年入庁(5年目)

実習授業が多い点に惹かれて農林高校に進学。今の職場でも、週に1日半以上は現場に出向き、現場監督業務にあたる



農林水産部農業経営課 主任  
渡邊 翠さん(33)  
2015年入庁(8年目)

益田勤務の際は、現場で初めて見る作物も多く、大ベテランの先駆的な農業者から多くを学んだ。農業者と直接関わり、成長できることは農業普及員の魅力の一つだ